

ワシントン、クルド人の新しい戦場

高橋和夫

●人事が万事

独立への長く苦しい戦いを続けてきたクルド人の新しい戦場はワシントンである。ワシントンに2本の旗を掲げた3階建ての小さな建物がある。これがイラクのクルディスタン地域政府の代表事務所である。掲げられた旗の1本はイラク国旗であり、そして他の1本がクルディスタン地域政府Kurdistan Regional Government（以下、KRG）の旗である。

もちろんワシントンにはイラクの大使館もある。しかし、それとは別個にKRGが代表部を構えているわけである。国家の一部が他国に代表部を構える例は、実は珍しくない。たとえば東京や横浜にはアメリカの州政府の事務所が数多く存在する。アメリカ大使館とは別個に自らの州への投資を誘致している。

しかしながら、こうした州政府事務所とKRG代表部の違いは、州政府事務所を置いている州がアメリカからの離脱を目指してはいないのに対し、KRGはイラクからの分離独立の姿勢を強めている点である。

この事務所が開かれたのは2007年である。それまでもクルド人はワシントンでロビー活動を行っていたが、小規模であったし、活動が統合されていなかった。というのはイラク北部を支配する連合政権を構成するKDP（クルディスタン民主党）とPUK（クルディスタン愛国同盟）が、それぞれの事務所を置いて活動していたからである。これが2007年に統合されたわけだ。初代の代表はクバニ・タラバーニーが務めた。クバニは、PUKの指導者でフセイン没落後のイラクの最初の大統領でもあったジャラル・タラバーニーの息子である。

2代目の代表はバヤン・アブドルラフマーンである。初めての女性代表である。バヤンの父親サミ・アブドルラフマーンはKDPの大物で、大統領でKDPの党首のマスード・バルザーニーに次ぐ地位を占めていた。

KRGの副首相を務めていた。そのサミは2014年に暗殺されている。

バヤンは、それまではイギリスの『フィナンシャル・タイムズ』紙の東京特派員を務めていた。イギリス英語を話す。ワシントン代表に就任する以前は、やはりKRGのロンドン代表であった。こうしてみると、このワシントン代表部の人事も、他のKRGの機関と同様に、PUKとKDPの間での「たすきがけ」で運営されているようだ。

代表を含めてスタッフは10名弱でクルド人と「普通」のアメリカ人が働いている。普通と言っても実はアメリカ人としては普通ではない。クルド人の事務所で働くというのであるから、当然ながら普通ではない。

たとえば2017年9月に同代表部を訪れた際に対応してくれたアメリカ人スタッフは、英国のエクスター大でクルド研究で修士号を得ていた。また、その前にエルビルで2年を過ごした経験のある人物だった。まずインターンで働き、その後に正式採用されたという。かつてロンドンのKDP代表部を取材したが、その時もクルド問題に詳しいイギリス人スタッフが活動を支えていた。

この代表事務所が、KRGの政策への理解と支持を求めメディアに学会に議会にホワイトハウスに働きかけている。

●クルド人の友人たち

スタッフの数は少ないが、米国でクルド人は孤独ではない。イラクのクルド人の立場の理解者であり支持者であるとして知られている著名な人物を何人か紹介しよう。

まずピーター・ガルブレイズ元駐クロアチア大使があげられる。ガルブレイズが議会の上院のスタッフとして1980年代に働いていた時期に、イラクのフセイ

ン大統領がクルド人に対して化学兵器を使用した。ガルブレイズは、上院議員たちに働きかけて、これを非難する決議を採決させた。それ以降は、クルド人に対して化学兵器の使用が止まった。

フセイン体制崩壊後は、イラク北部に成立したKRGの顧問として、その憲法の起草に助言を与えたりした。また2007年には *The End of Iraq* (イラクの終わり) という書籍を出版して、イラクの分割を訴えた。より正確には、イラクは実質上は分裂していると主張し、その事実を世界は受け入れるべきとの議論を展開した。現在もクルド人のための発言を続けている。

ちなみにガルブレイズは著名な社会経済学者のケネス・ガルブレイズの子息である。父ガルブレイズは、ハーバード大学教授であり、ケネディ政権下で駐インド大使を務めた。また『不確実性の時代』、『豊かな社会』、『新産業国家』など数々のベスト・セラーで知られている。

もう1人、元大使でクルド人の友人を挙げるとザルマイ・ハリルザードがいる。ハリルザードはブッシュ息子政権期に駐アフガニスタン、イラク、国連の3つの大使ポストを歴任した。イスラム教徒として、アメリカ政府内で最も高位に就いた人物である。

1980年代に国務省に務めていた時期に、既に述べたように、フセインがクルド人に対して化学兵器を使用した。その際にはスティンガー・ミサイルのクルド人への供与を政権内部で打診したりなどしたようだ。当時は、もちろんリーガン政権であった。以降もクルド人との接触を続けていたようである。ブッシュ息子政権の終了後はコンサルタントに転身している。ガルブレイズほど強くクルド人の独立を支持しているわけではない。だが、その独立の可能性を視野に入れた政策の必要性を訴えている。

3人目に別の分野の人物のジェームズ・ジョーンズを紹介しよう。ジョーンズは、海兵隊の将軍にまで昇進して退役した。その後2009年1月にオバマ政権が成立すると、その年の10月まで同政権の初代の国家安全保障問題の補佐官を務めた。大統領に近い影響力の強いポストである。

このジョーンズが2012年にアメリカ・クルディスタン・ビジネス評議会という組織のトップに就任して、KRGとの関係の深さを印象付けた。そもそものジョーンズとクルド人の縁は、1991年の湾岸戦争後に

始まった。

1991年の1月から2月の湾岸戦争においてアメリカ軍を主力とする有志連合諸国の軍隊がイラク軍を一蹴して勝利を収めると、北部のクルド人はフセイン体制が揺らいだとみて蜂起した。ところ



ワシントンのクルディスタン地域政府代表部
(2017年9月 筆者撮影)

がフセインは、湾岸戦争中も温存していた虎の子のエリート部隊を繰り出して蜂起を鎮圧した。フセインによる報復を、特に化学兵器の使用を恐れたクルド人が、トルコとイラン国境に100万人単位で殺到した。このクルド人難民を保護し人道支援を与える作戦が、米軍によって実施された。ジョーンズ將軍は、自らの部隊を指揮してクルド難民の保護と支援活動に参加した。

●ワシントンという戦場

こうした人々の協力もあって、クルド人のロビー活動は成功を重ねてきた。KRGの将兵が対IS(「イスラム国」)作戦で勇敢に戦ってきたのが、こうした成功の背景であった。2015年5月にはKRGのバルザーニー大統領がワシントンを訪問した。しかもオバマ大統領との会談が実現した。米大統領が国家の首脳以下と会談するというのは、極めて異例である。また2016年の米大統領選挙では、立候補者の多くが対IS政策としてクルド人への武器供与を挙げた。

しかし、より実質的で重要な問題に関してはクルド人のロビー活動は結実していない。つまり米政府をKRGの独立承認へと動かすという課題は、残されたままである。その証拠に、2017年9月26日のKRG支配地域での独立の可否を問う住民投票を前に、国連安保理は、反対の決議を採択した。米を含む5大国が一致してクルド人の独立への希求に待ったをかけた形であった。ISの脅威が低下するにつれ、各国はクルド人の協力を必要としなくなりつつあるからだろうか。ワシントンという戦場でクルド人は苦しい戦いを迫られている。

(たかはし かずお／放送大学教授)